

学生アンケートに基づく初年次教育プログラムの現状と課題 —「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」の取組—

久保田祐歌、吉田 博
(徳島大学 総合教育センター)

1. はじめに

体系的・組織的な初年次教育の実施は、「学士力」を構成する学修成果を4(6)年間で育成する上で効果的であると言われている(川嶋2008)。

徳島大学で平成27年度から開講した「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」は、全学的に展開される初年次教育プログラムである。各学部・学科ごとの特色に応じて、①専門分野の早期体験、②ラーニングスキルの修得(文章力、プレゼンテーション力、協働力)、③学習の振り返りの三要素が必須要素として授業設計に組み込まれている(平成27年度は15プログラムが実施された)。学生はSIH 道場を受講することで、学修や研究への意欲を高め、大学で学ぶためのラーニングスキルを身につけ、主体的に学修計画を立て学び続ける習慣を身につけることが期待されている(吉田・久保田2016)。

「SIH 道場」はその副題「アクティブ・ラーニング入門」で示されているように、学生に能動的学修を促すためのプログラムであり、授業担当教員はその手法として、アクティブ・ラーニングを促す教授法を用いる。また、反転授業やルーブリック、ラーニングポートフォリオの活用を通して、授業時間の有効活用、学修成果の評価基準の明確化、学生の振り返りへのフィードバック等を行う。

実施初年度の平成27年度としては、各学部・学科で設計されたSIH 道場の受講を通して、学生がSIH 道場の到達目標を達成したかについての効果検証が課題となる。そして、その結果を改善に繋げるサイクルの構築も必須となる。

本発表では、SIH 道場のアセスメントプロセスを概括しプログラム改善の流れを示すとともに、学生アンケート結果等の分析に基づきSIH 道場プログラムの現状と課題を報告する。

2. SIH 道場のプログラム改善

SIH 道場のプログラムを検証し改善に繋げるためにはどのような手順を踏めばよいのか。学生の学修アセスメントについては、以下の6つの基本的なステップがある。1) 学習目標の開発、2) カリキュラムと目標の整合性のチェック、3) アセスメント計画の開発、4) アセスメントデータの収集、5) プログラム向上のための結果活用、6) アセスメントプロセスの不断の検証および必要な場合の修正(Allen, 2004)。

このステップに従い、SIH 道場のアセスメント手順を確認すると、1)「学習目標の開発」については、すでに述べたように、3つの目標(「学修・研究意欲の向上」「ラーニングスキルの修得」「学修の振り返り」)を設定している。2)「カリキュラムと目標の整合性のチェック」については、授業設計コーディネーター(以下、「コーディネーター」と表記)が3つの目標を満たすことを意図した授業設計を行っている。3)「アセスメント計画の開発」については、SIH 道場の評価指標を策定し、目標到達度等を学生アンケートによって調査すること、各部局のプログラムをコーディネーターが「プログラム設計評価シート」を用いて自己評価すること等を検討した。大学教育再生加速プログラム(AP)実施専門委員会での評価計画の確定を経て、総合教育センター教育改革推進部門が4)「アセスメントデータの収集」のための学生アンケート項目、設計評価シートのフォーマットを作成する等の準備および結果の集計・取りまとめを行う。SIH 道場終了後にコーディネーターが行う自己評価は、学生の学修成果(レポートやプレゼンテーションの評価)、学生アンケートの集計結果等を参考にしながら、3つの目標を学生が達成可能な授業内容、実施方法であったかを

「プログラム設計評価シート」に書きながら振り返るものである。記述された改善点、次年度に向けた対応策を参照しながら、次年度のコーディネーターが授業設計を行うことでプログラム改善に繋げることができる。こうした形で 5)「プログラム向上のための結果の活用」を促している他、SIH 道場の全取組を総括する「振り返りシンポジウム」を行うことで、全学的な取組共有・省察の機会を設けている。6)「アセスメントプロセスの不断の検証および必要な場合の修正」については、AP 実施専門委員会において、SIH 道場の評価計画が改善に資するものであるか等、事業全体の自己評価を行った上で外部評価委員会の評価を受け改善に繋げるサイクルを整備している。

3. アンケート結果から見た現状と課題

アセスメント計画において、学生アンケートは、SIH 道場の目標到達度等を検証する素材の一つとして位置づけられる。SIH 道場実施後、学生は到達目標に関連する、「1. SIH 道場の目標理解」「2. 体験学習を通じた興味関心の向上」「3-5. ラーニングスキル（文章力・プレゼン力・協働力）の要点理解」「6. 課題の評価基準の理解」「7. 学修の振り返りの意義理解」「8. 授業外の学修」「9. 能動的学修（AL）の意義理解」「10. SIH 道場の満足度」についての 10 設問に 4 件法で回答した（回答率 87.5%）。10 設問の全てに 7 割以上が肯定的な回答をしたという結果となった。

続いて、10 設問ごとに、①設問の回答（4~1）に応じて 4 つの群に分け、②各群における他の設

問ごとの回答の平均値を算出した。これらのデータを用いて、①を独立変数、②を目的変数として回帰分析を行った。例えば、「1. SIH 道場の目標理解」の回答に対する 4 つの各群の他の設問に対する回答の平均値は図 1、回帰分析における決定係数と回帰係数は図 2 の通りである。

同様に全ての設問において回帰分析を行った結果、SIH 道場の目標を理解することが、体験学習を通じた興味関心の向上に大きく影響を与えている。また、能動的学修（AL）の意義を理解することは、多くの項目にポジティブな影響を与えていることが分かった。その他の分析結果は発表の際に紹介する。

集計結果をプログラム別で見ると、各設問の肯定的回答の割合には高低がある。アンケートの自由記述等からは、例えば「SIH 道場の目標理解」が十分でないこと等が推察され、プログラム設計評価シートの記述からも、授業担当教員と SIH 道場の趣旨を十分に共有できていない状況が伺える。AP 実施専門委員会で何が問題であるかを抽出し、各プログラムの SIH 道場の実施支援に活かしていくことが今後の課題と言える。

参考文献

- 1) 川嶋太津夫；「学士力」概念と初年次教育への含意，初年次教育学会誌，1(1)，33-40，2008.
- 2) 吉田博・久保田祐歌；初年次教育でラーニングスキル、ティーチングスキルの向上を目指した組織的取り組み，平成 27 年度大学教育カンファレンス in 徳島発表抄録集，36-37，2016.
- 3) Allen Mary J. ; Assessing Academic Programs in Higher Education, 2004.

1. 目標理解	2. 体験学習	3. 文章	4. プレゼン	5. 協働	6. 基準理解	7. 振り返り	8. 授業外学習	9. AL 理解	10. 満足度
4	3.70	3.52	3.63	3.77	3.47	3.69	3.46	3.72	3.55
3	3.22	3.17	3.21	3.33	2.99	3.20	2.96	3.27	3.06
2	2.81	3.01	2.95	3.11	2.73	2.84	2.72	2.95	2.66
1	2.21	2.98	2.73	2.98	2.36	2.64	2.55	2.57	2.32

図 1 「SIH 道場の目標理解」の各群における他の設問に対する回答の平均値

	2. 体験学習	3. 文章	4. プレゼン	5. 協働	6. 基準理解	7. 振り返り	8. 授業外学習	9. AL 理解	10. 満足度
決定係数	0.99	0.87	0.98	0.93	0.99	0.97	0.94	1	0.99
回帰係数	0.49**	0.18	0.30*	0.26*	0.36**	0.35*	0.30*	0.38**	0.41**

**：p<.01, *：p<.05

図 2 「SIH 道場の目標理解」の各群における他の設問との回帰分析の結果